

「……んんっ♡ ああ♡」

ぱちゅん♡ ずちゅ♡ ぐちゅっ♡

卑猥な音が耳に届く。火照った体、漏れる吐息、どうしようもない快感の波に全身が包みこまれていく。視線を下に向けると黒く光った太い男根が見え、私の中へ奥深く入っていく。逞しいペニスには肉壺を何度も往復し、その極太のカリで容赦なく中を擦っていく……。愛液は泉のように溢れ出し、太もも付近までビチャビチャになっていて。それが滑りをよくしているのか、彼からのピストンをより強力なものにしていた……。

嬌声が出る、出てしまう。私の意思とは無関係に……淫乱な声が口から流れ出る。

「……っ、ああっ♡ ぐっ♡ はああああ♡」

「だらしない喘ぎ声が漏れているぞ」

眼の前のいる男からそう呟かれ、慌てて手で口を覆う。果てしない快感の連続に意識が飛びそうになりながら、なんとか気を紛らわそうと横へ視線を移した。

その先には、普段一緒に働いている三人の職員がいて。談笑しながらも少し不安そうな顔で、私が普段使っている机を見ている。三人の仕事はもう終わっている。普段なら既に帰宅しているだろう。しかし、彼らが帰るのはもう少し後になりそうだ。

何故なら……彼らは私の帰りを待っていてくれるのだ。夜の施設当番に行ったり戻ってこない私を、心配してくれているのだろう。心の底から申し訳ない気持ちでいっぱいになる。ただ、そんな私の気持ちを嘲笑うかのように、気持ち良すぎる刺激に体が

「再び」熱を帯びていく。

理性を総動員しながらも、耐えようのない甘美なピストンに、ぐちゅぐちゅのおまんこは再び絶頂の準備を整えているのだった。ああ、まただ、またきちゃうんだ。ああ……、いやあ……♡うう、くる。うう♡　くる、くる……♡

ぐちゅん♡　ぱちゅ♡　ばちゅん♡　ぶちゅ♡

「……ふー♡　んん♡　はあ♡　いっ♡」

「またイクのか？　いいぞ、またたつぷりとイケ。俺を見ながらちやんとイクんだ」

「いや、いや♡　あ♡　ん♡　はあ♡、はあ……♡」

「嫌なわけあるか。こんなにトロトロな顔をして、淫らな声も出しておいで」

ずちゅんっ♡ ずちゅちゅ♡ ぶちゅう♡

下から押し上げるピストンがより強くなる。天にも昇りそうな抽送に、意識もまた空へ浮かんでいきそうになる……。あ、ああ、駄目だ、声を出したら駄目だ。彼の魔法で姿は見えないとはいえ、三人に気づかれてしまう。でも、声が、私の意思とは裏腹に……もううう……♡

「あっ、ひっ♡ ああ♡ つんっ♡♡」

「ほら、イケ。俺のちんぽを美味しそうに啜えこんだまま、またイケ」

「んっ♡ ひい♡♡ んあ♡♡」

……あ。あああああ。

あああ、もうむりい。

まって、ねえ、おねがいい……まって。

「ん、ああああ♡ んあああ~~~~♡♡」

私の願いなどお構いなしに、弾ける快感に全身を震わせながら、私は今日何度目かわからない絶頂を迎えてしまった。その様子を眼の前の男は愛おしそうに眺めた後、妖艶な笑みを浮かべたままキスを始める。まだ絶頂の余韻が残っているのに、まるで気にしないと言うように彼に口内を犯されていく。

「ふああ♡ んんっ♡ くちゅ♡ ああ♡」

「……」

「んはああ♡ ぴちゃっ♡ ああっ♡」

「……イッたか？」

不意に、その言葉を投げられて。

今もなお痙攣する膣内を自覚しながらも、私は相手を見据えて震える声で言うのだった。

「ん……♡ い、イって……ませ、ん……♡」

「ふふっ、そうか」

心底楽しそうにそう言って、彼にもう一度キスをされた。同時に、ちゅぷっ♡と亀頭が膣口へ添えられて。

「……あ♡」

「なら、また始めよう」

じゅぷぷうう♡と反り立ったおちんちんが中へ入ってくる。ああ、ああ……♡ また挿入されてしまった。恥ずかしいけれど、もう、愛液に塗れた肉壺は容易に彼のペニスをお迎えしてしまっている。勇ましいおちんちんの形が……ハッキリとわかる。わかってしま

う。

んあっ……すごい。このおちんちん、凄すぎる♡　なんて太く、固いのだろう。一体どれだけ私を抱くつもりなのか見当もつかない。さらには、彼の瞳の奥底に宿る輝きが、私を絶対に自分のものにする決めているように見えた。それほどの欲情の権化が……私の全てを包み込まんとしている。

「さあ、勝負の続きをしようか」

「……んん、ああ♡」

彼の……ワイド・ローガーの低い声が脳内に響く。その声すら、今の私には快感だった。

またピストンが始まる。ああ、んっ、気持ち良い……♡

どうして……、どうしてこんなことになっているのだろう。私

はただ、彼に転職を伝えただけなのに。

再開される快樂の海に溺れながら、私はそう思わざるを得なかった。

※

【約一時間前】

いつも歩いているはずの廊下が、夜になるとまるで別の世界に見えるのはどうしてだろう。昼間は慣れ親しんだ装飾品も、今は不気味に見えてくる。壁に飾られた古びた絵画は魔法で薄っすら光っていた。幻想的ともいえるけど……深夜に一人で見た場合、

やや恐怖が勝ると思う。

天井から吊り下げられたクリスタルのランプは、夜だけ青白い光を放ち、ぼんやりと廊下を照らしていた。その光が床に影を作り、まるで何かが動いているように見えて少し怖かった。

「夜の学校って本当に怖い。早く施錠して帰ろうっと」

独り言を呟き、鍵の束を握りしめ早足で歩いていく。今夜の当番は私一人。まだ職場の同僚も何人か教員室に残ってはいるだろうが、施錠するのに複数人もいらないだろう。同期から一緒にやろうかと誘われたけど、やんわりと断った。各教室を回って扉を施錠するこれは、誰でもできる簡単な仕事だから。

「でも、やつぱり一人は怖い……!」

足音だけが廊下に響く。コツン、コツンと自分の足元から鳴る

音なのに、嫌に不気味で、思わず背後を振り返る。誰もいないとわかつているのに、これを既に五回はしている。情けない自分に溜め息が漏れる。でも、誰もいないことを確認できて少しホッとする……。そしてまた歩き出した、そんな時だった。

明かり？

廊下の先に、教室の中から漏れる明るい光が見えた。こんな時間に残っているのだろうか。生徒なら注意しないといけない。ただ、それが人ではない生き物だとしたら……？ 確か、教員室にはかつて過労死した教員の霊が出るそうだ。嫌なことばかり考える思考を振り落とし、少し笑みを浮かべて光のもとへ向かった。実際のところ、答えは知っているから。教室の扉の前に立ち、中を覗き込むと、そこにいたのはただの人間……。いや、ただの人

間なんかじゃない。あの人がいた。

孤高の魔法使い、ワイド・ローガー教授。深緑の髪が青白い魔法の灯りに照らされて、まるで夜の森の中に佇む一本の樹木のようだ。長い指が書物をめくるたびに、淡い緑の魔力の光がその動きに沿って揺らめく。高い鼻梁の向こうにある鋭い瞳は、読んでいる本にしっかりと焦点を合わせている。その外見の美しさと有無を言わさぬ風格は、思わず見惚れてしまうほどの存在感なのだ。

彼は皆から「孤高のローガー」と呼ばれている。冷静で落ち着いた雰囲気を漂わせており近寄りがたい印象ながら、実力は学校随一であり数多の魔法を使いこなす。学外からも一目置かれており、嫉妬と尊敬の念を抱かれている人だ。

「今日も夜遅くまで読書してる……」

ワイド・ローガー教授を改めてじっと見てしまう。長身で姿勢も良く、顔も抜群にいい。男女問わずその人気の凄まじさは言うまでもないだろう。特に女性からの人気は絶大でファンクラブまであるほどだ。

深緑の髪は驚くほど滑らかで、柔らかな月の光に照らされれば吐息を漏らすほどの美しさである。天は二物を与えずと言うけれど、唯一の例外が彼なのかもしれない。あんなにかっこよくて凄いい人に弱点なんてあるのだろうか。彼の恋人は大変だ。……あ、でも、恋愛の噂は聞いたことがない。

「ん？ ……ああ、君か」

そんな野次馬的なことを考えていたら、教授が本から目を離し、ふと私の方をチラリと見た。瞬間、胸がドキッと鳴る。慌ててペ

コリと頭を下げると、彼は「そう畏まるな」と低い声で呟きながら、ゆったりと立ち上がった。

「中に入りたまえ」

「い、いつもありがとうございます」

「礼など不要だ。君との時間は俺にとっても有意義なのだから」
立つ動作ひとつとっても無駄がなく、洗練された佇まいだ。教授は長い指で袖口を軽く直しながら時計に目をやる。その所作の一つひとつが実に綺麗で、数多の女性を虜にするのも頷ける。そんな彼の動きに目を奪われそうになながらも、何とか正氣を保って教室の窓の施錠を確認する。仕事だ、今は仕事に集中しないと。教室の窓を順番にチェックする。……よし、大丈夫。問題ない。謎の緊張を感じつつ、この部屋での仕事を無事に終えることがで

きた。ただ、妙な感覚が私を包む。誰かに……見られている気がする。背中にじんわりと感じる視線……？　まあ、気のせいだろう。あのワイド・ローガーが私みたいな凡人なんかに興味などあるわけがない。今日は朝から仕事で忙しかったなあ。こんな時間だし、きつと疲れているのだろう。早く仕事を終えて帰ろう。あ、そうだ。化粧水を忘れずに買わないと。もうすぐ切れそうなんだよね。

「……よし」

施錠作業も終わり、教室を出ようと歩を進める。すると、後方から声がかかって。

「いつものように、コーヒーでもどうだね」

振り返ると、教授がこちらを見ていた。少し微笑んだ口元に思

わず目がいつてしまう。美形という言葉がこれほど似合う人もそういない。

一瞬迷ったけれど、せっかくだからとお言葉に甘えることにした。「是非」と返すと、彼はほんのりと笑みを深くして。ワイド教授がコーヒーを淹れる準備をする姿を、後ろからそっと見つめる。湯気が立ち上るケトルの向こう側にいる彼を見ながら、ふと胸の中に小さな嬉しさが芽生えた。

「いつもありがとうございます」

「先も言ったが、礼には及ばないよ。俺が一方的に誘っているだけだ」

優しい人だ。こんな、どこにでもいる学校職員の私にもお茶を振る舞ってくれる。実のところ、教授からお茶の誘いを受けたの

はこれが初めてじゃない。既に何回か誘いを受けていて、こうして一緒に時間を過ごすことがあるのだ。

質問される内容は他愛ない話ばかりだけど、あのワイド・ローガーとお話できるなんて滅多にないことだ。とても光栄で、私みたいな一般の職員にもお茶を誘ってくれる教授のことを、心から尊敬する。いつも遠い存在だと思っていた彼と、こうして同じ空間で言葉を交わせることが、なんだか夢のようだった。

「今日の夜空は雲一つないそうだ。帰りに見上げてみるといい」
「はい、楽しみです」

もしかしたら、これをきっかけに彼ともう少し親しくなれるのかもしれない。身分不相応ながら、そんな淡い期待が心のどこかに浮かぶ。だけど、同時に胸の奥にじんわりと広がる悲しみも感

じていた。この関係が深まることは、もうないのだから。残念だけれど、この美味しいコーヒーとも別れの時がやって来た。だからこそ、早めに伝えたほうがいい。そう思いながら、意を決して口を開く。

「やっぱりここのコーヒーの香りは最高ですね。幸せな気持ちになります」

「ただの安物だ。世辞は不要だよ」

「そんなことはありません！ 本当に良い香りです！」

「ふふっ、そうか。ありがとう」

「でも、この美味しいコーヒーとも、そろそろお別れですね」

「……。……何故かね」

「え、と。まだ誰にも言っていないんですが、教授にだけはお伝

えます」

「……」

「実は、もうすぐ転職するんです」

一瞬、教授の手が止まった。湯を注ぐ動きがぴたりと静止する。それを見て、あれ、どうしたのかな、と少しだけ不安になりながら、私は続けた。

「知り合いの魔法研究施設で事務員をしていた方が退職されました。席が空いたので来ないかと誘われたんです。私自身、魔法研究所の出身ですし、お給料もいいので良縁かなと思いました」

自分の言葉をできるだけ明るく伝えようと努めた。魔法学校の仕事には満足していたけれど、魔法研究所での仕事も私にとって魅力的な未来だった。熟考の末、転職することを決めた。明日、

退職届を提出するつもりだ。

そこまで説明すると、教授は小さく「そうか」と呟いただけだった。彼の言葉はまるで冷たい風のように、どんな感情なのか言葉だけでは感じ取ることができなかった。そして教授は再び手を動かし、淡々とコーヒーを淹れる作業を続ける。

正直、応援してくれるとちよっと思っただけなので、少し悲しい。でも、彼にとって私はお茶を誘う程度の存在。これが本来の関係なのだ。今の幸せを、忘れないようにしよう。また、ここまで言うて教授に説明していい点もある。

本当のところは、転職を決めた最大の理由は他にあるのだ。私は自分に自信がないので、誰かから立派な女だと認められたい欲求が密かにある。魔法研究施設で結果を出せば、間違いなく誰も

がその事実を認めることになるだろう。幼少の頃からの大願を成就する機会が、眼の前に訪れたのだ。これを逃せば、もうチャンスはない。だからこそ、この機会をものにしたい。

「出来たよ」

「ありがとうございます」

ワイド教授の淹れてくれたコーヒーを一口含むと、驚くほど深い味わいが広がった。飲む度に感動する。今まで飲んできたどのコーヒーとも違う、圧倒的な風味。酸味も苦味も、なんだか妙に鮮やかで複雑な味わいだ。少しだけ独特な風味も混ざっているけれど、嫌ではなく、むしろ体の芯からじんわりと温まる感覚がするのだ。

「ああ、やっぱり美味しいです。最高のコーヒーを、ありがとうございます」

「ございます」

「……」

私は笑顔を浮かべながらお礼を言った。目の前の教授は静かに私を見つめるだけで、言葉は返してこない。その視線はどこか鋭くて、冷たく、けれど何かを秘めているようにも思えた。いつもなら薄く笑ってくれるのに……。妙な違和感。心に影があるような。もしかして、失礼なことを言っただろうか。

「ほ、本当に美味しいです」

「……」

教授は何も言わない。ただ静かに私を見つめている。その視線を自覚しながら最初は愛想笑いをしていたけれど、徐々に耐えられなくなつて、淹れてもらったコーヒーを見る。深淵のような黒

がそこにはあった。どこまでも深い黒の世界。教授からの視線を避けるようにしてカップを持ち直し、可能な限り早めに飲み干す。

やっぱり、何か失礼なことをしたのかもしれない。教授とは良好な関係のまま別れたので、こういう時は早々に退出するのが一番だ。嫌な空気から早く解放されたかったというのもある。飲み干した後、カップを置いて「ごちそうさまでした」と立ち上がる。教授は変わらず私を見ていて。じつと見ていて。どこまでも見ていて……。吸い込まれそうな瞳だった。

「し、失礼します」

視線を強く感じつつも、出口の方へ歩みだすと、ふと体がいつも以上に温かいことに気づいた。いや、それ以上に——？　なんだか、変だ。じんわりと、全身に熱を帯びるような……？　なん

「え、なに、これ？　ん、んん……」

胸のあたりから全身へと熱が広がっていく。最初は心地よい温かさだったのに、次第に暑さに変わっていく。脈が速くなり、頭の中に霧がかかるようなぼんやりとした感覚も押し寄せてくる。この熱、普通じゃない――。けれど、どうして？

「んっ。な、なに、これ」

混乱しながらもなんとか冷静さを保とうと、廊下に出るためさらに足を進めた。ここを出て、少しでも冷たい風に当たれば少しはこの暑さを軽減できると思ったから。

「どこへ行くんだ？」

言葉と同時に、後ろから乱暴に腕を掴まれる感覚が走った。

「……あつ」

思わず足が止まり、ビクリと体が震える。振り返ると、ワイド教授が私の真後ろにいて腕を掴み、こちらをじっと見つめていた。先程からずっと、ずうっと私を見ている。見続けている。その瞳の奥には、いつも遠くから見ている冷静さとは違う、別の何かが蠢いているような気がした。何が起きているのか理解が追いつかない。今私の眼の前で起こっている出来事は、本当に現実なの？「ど、どうしたんですか……？」

震える声が自分のものとは思えなかった。腕を掴まれる力は強く、女一人の力で逃れることなど到底できそうにない。正直、予想していなかった展開に頭が回らない。このままどうすればいいのか判断に迷っていると、教授からグイッと引き寄せられる。ふわりと彼の甘い匂いがして。

あ、あの孤高のローガーが目と鼻の先にいる……！ 驚天動地な心境なれど、思わず胸が高鳴ってしまふ自分がいた。そんなドキドキな私とは対象的に、終始涼しい顔をする彼は……徐ろに手をこちらへ差し伸べ、私の耳に軽く触れた。

瞬間、電気でも走ったような甘い快感が全身を駆ける。

「んひゃあっ♡」

今まで出したことのない声が口から出た。自分の声でないような感覚に、思わずたじろいでしまう。対し相手は、ふむと頷きながらゆったりとした口調で言うのだった。

「効果は出ているようだな」

「え、え……？」

「半信半疑ではあったが、たまには魔法以外のものを試すのも悪

くない」

……彼の、ワイド・ローガーの言っていることが何一つ理解できない。確かなのは、現在進行形で私の体が熱くなり続けているということ。でも、病気で高熱を患った時みたいな感じではない。そういう熱さではなく、えと、その……。一言で言えば、体のある箇所が、じゅん♡と熟していくような不思議さで。

「あ、ううっ」

「我慢できなくなってきたか。良い光景だ」

勝手に足がモジモジしてしまう。あつい、熱い……！ 下腹部が熟々と熱くなっている。ああ、なにこれ、こんな勝手に熱くなるものなの……？

「あっ、んん、あっ………！」

「しばらく見ていたいが、まあ飲ませた俺の責もあろうか。安心するといい」

「……うんっ」

「軽くイかせてやろう」

「んんっ!? んああっ♡」

言い終わるか否や、教授にグイッと顔を引き寄せられて唇を奪われた。ぷちゅり♡と唇が触れた途端、そこから快感の波がドバァと生まれる。腰あたりがビクビクして、か、体が勝手に……反応してしまう。なにこれえ……♡

「んあっ♡ ああ、ひいうっ♡ んんっ♡」

「ほら、口を開けろ。少しでいい」

「あっ、いいっ♡ ま、まあっ♡」

こちらのお願いを無視して、ワイド教授はさらに舌を押し込んでくる。そのままベロリと口内を蹂躪して、唾液ごと吸い取られてしまった。

「あああ♡ んんっ♡♡」

「ん、まだコーヒーの味がするか。全て吸い取ってやろう」

「ああっ♡ ひっ、あっ♡ ん、んっ♡ ちゅっ♡」

くちゅくちゅ♡ ぴちゃ♡ くちい♡ ちゅるう♡

彼の舌が私の舌はもちろん、歯茎や舌裏にいたるまで丁寧に舐めていく。一舐めされる度に快感が脳へダイレクトに届き、フワッと浮遊するような気持ちよさに変わっていつて。……キ、キスされただけでこんなになっってしまうなんて、お、おかしいよ……。自分の体じゃないみたいに感じてしまう……。♡

「ふあっ、あっ♡ ん、くちゅ♡ あ、うう♡」

「ああ、舌裏が好きか。卑猥な奴だ」

「ああああっ♡ ああ、ああっ♡ んんっ♡」

舌をねっとりと絡めて、ぐにゅぐにゅ♡とかき乱される。口から唾液がダラダラと溢れていき、体の力も抜けていく。何もできずに教授のディープキスに犯されていくのは、たまらなく怖くて、けれど感じてしまう。こんなことになるなんて思いもしなかった。逃げたいのに逃げられない。感じたくないのに感じてしまう。体だけが素直になって、キスから生じる刺激を素直に受け止めてしまう……♡ ああ、舌がトロけていきそうだ。

「はあ♡ んんっ♡ つくう♡ だ、だめえっ♡ そこおっ♡」

敏感な舌裏を執拗に責め始める教授。先ほど私の弱い所と知ら

れてしまったため、ずっとそこだけを重点的に舐めている。しかも後頭部に手を回されて、今や何もできない状態でひたすら私は犯されている。れろ、れろろろ♡と教授の舌尖でずっと舐められる。頭の中がずっとフワフワしていて、腰もびくん♡と強めに反応してしまう。

「ああ♡ んあぁ♡♡ あ、あぁん♡♡ ……は、あ♡」

「そのままだ。何も考えず、そのまま感じろ」

「あああ、あぁ♡♡ ひい♡♡ いい♡♡ んん♡♡」

ふわっ、ふわわっ何度でも浮遊感が生まれてくる。ただディープキスをされているだけなのに、より一層、空中に浮いているかのような不思議な感覚が強くなっていく。くちゅう♡ ちゅぷ♡ 舌裏をコシコシ♡されるのたまらないよお。ああ、なにこれ♡